京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

１．研究課題

仏教天文学説の起源と変容

Origins and Transformations of Buddhist Astronomical Doctrines

２．研究代表者氏名

小林　博行

KOBAYASHI, Hiroyuki

３．研究期間

2021 年 4 月-2024 年 3 月

４．研究目的

本研究は，仏教経典に見られる広い意味での天文学にかかわる諸説を検討し，その多様な起源と変容を明らかにする。仏教経典の中には，宇宙の構造，太陽と月の運行，暦法，占星術などについての諸説を掲載するものがある。これらはもともと成立時期も背景もさまざまであったが，さらにインドから中国へ，そして朝鮮，日本へと伝わる過程で各地の文化や社会に適応しつつ，大きく変容していった。

その具体的プロセスを明らかにするために，本研究ではとくに 19 世紀日本で提唱された「梵暦」に着目し，そこに取り上げられた諸学説の起源と変容の解明を試みる。「梵暦」の推進者たちは，多くの経典から関連諸説を集めて，須弥山を中心とする仏教的世界像の再構築を目指した。それら関連諸説の相違や重複に注目しつつ，その由来を検討することで，長期間にわたる広範な文化伝播現象をとらえ，さらには「梵暦」自身を批判的に乗り越えることを目指す。

In this research, we examine astronomical doctrines found in Buddhist sutras in order to elucidate their multiple origins and transformations. Some Buddhist sutras are known to contain various theories concerning cosmic structure, solar and lunar motions, calendar systems, astrology, etc. Originally formulated in different times and circumstances, these teachings underwent substantial transformations, adapting to local cultures and societies in the process of diffusion from India to China, then to Korea and Japan.

To trace their actual processes, we focus on the "Bonreki", a Buddhist astronomical campaign advocated in 19th century Japan, and attempt to shed light on origins and transformations of doctrines exploited thereby. "Bonreki" proponents garnered information from many sutras to reconstruct the Buddhist universe with Mount Sumeru at its center. By examining the provenance of doctrines while paying due attention to their discrepancies and

redundancies, we aim to gain an understanding of a long and broad-ranging series of cultural transmissions and to critically surpass the "Bonreki" itself.

５．研究成果の概要

本共同研究の成果は以下の３点にまとめられる。

１）『宿曜経』会読研究

唐代の中国で成立した『宿曜経』の内容と翻訳の文化的背景、現存写本のテキスト異同と書写系統などについて重点的に検討し、２年度目に全編の通読を完了した。また研究会における検討・討議を通じて、同書の理論的性格や、翻訳の特徴、諸本の異同・系統についての理解と問題意識を共有した。今後はそれらの成果を訳注の形にまとめるための準備を進める予定である。

２）『仏国暦象編』会読研究

円通『仏国暦象編』（1810）の訳稿検討は２年度目より本格化させ、月２回のペースで研究会を実施して、巻２の途中から最終第５巻の途中までの検討をすすめた。また巻１・２の検討済み訳稿は現在編集作業をすすめている。巻５の残りの検討と、すべての訳稿の集約・編集作業は、2024 年度からはじまる「東アジア伝統科学における自然と人間」研究班（班長：平岡隆二、2024～2026 年度）に引き継ぎ、『京大人文研科学史資料叢書』から刊行する予定である。

３）個別研究の発表とセミナー等の開催

３年間の研究期間を通じて計 44 点の論文・論考（編著・共編を含む）を雑誌・書籍などに発表した。２年度目には、本研究班メンバーの寄稿によって、日本科学史学会欧文誌 Historia scientiarum の特集号「East-West Contacts and Scientific Culture in Early Modern East Asia 2」を刊行した。また、計２回の国際ワークショップを通じて、本研究班の活動を広く国際的に発信し、計１回の一般向けアカデミーセミナーを通じて、その成果を広く一般にも公開した。

６．共同研究会に関連した主な公表実績

国際ワークショップ「Magic in the Medieval and Early Modern Islamicate World and Europe」
日時・場所：2022 年 9 月 18 日（日）、京大人文研本館大会議室
主催：科研基盤 B「中世・近世イスラム圏と西欧における魔術的知の交流史」（代表：村瀬天出夫）および本研究班

Ryuji Hiraoka ed. Special Issue: East-West Contacts and Scientific Culture in Early Modern East Asia 2, Historia scientiarum vol. 32-2, 2023, pp. 59–156.

学会パネル「Astral Sciences in Context of Cultural Encounters」
学会名：ICHSEA 2023, Frankfurt
日時・場所：2023 年 8 月 22 日、ゲーテ大学（ドイツ）
オーガナイザー：平岡隆二（京大人文研）

人文研アカデミーセミナー「仏教天文学と文化交流」
日時・場所：2023 年 12 月 3 日、京大人文研本館大会議室＋zoom ウェビナー
参加総数：164 名

７．研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班で実施してきた『仏国暦象編』の訳稿検討・編集は、2024 年度に立ち上げる人文研共同研究班「東アジア伝統科学における自然と人間」（班長：平岡隆二、2024～2026 年度）で継承し、その成果は将来『京大人文研科学史資料叢書』（臨川書店）から刊行する予定である。また『宿曜経』会読研究の成果についても将来の訳注刊行をみすえた準備を進める。

上記の新研究班では、「自然と人間」というより広い枠組みから、東アジア伝統科学の内容と性格についての共同研究を進めるが、本研究班で行った仏教天文学についても継続的な議論を続け、その研究のさらなる進展を図る予定である。